

南天に小鳥図陶板

美術工芸資料館 館長 並木誠士

京都市左京区岡崎の府立図書館横にワグネル顕彰碑がある(図1)。ゴットフリード・ワグネル(1831・92)は、日本の伝統工芸の近代化に尽力をしたドイツ生まれの化学者だ。しかし、その業績を知る人はいまやほとんどいないだろう。まずは、このワグネルの事蹟を簡単に振り返ってみよう。

ゲッティンゲン大学で数物理学の学位をとったワグネルは慶応4年(1868)に長崎に来航、ほどなく佐賀藩に雇われて有田で有田焼の近代化を指導する。明治3年(1870)上京して、東京大学の前身のひとつとなる大学南校のドイツ語の教師となり、また、



図1
ワグネル顕彰碑

りで親しく話をすることになった洋画家の浅井忠を、京都高等工芸学校図案科の教授に誘うことになる。

明治35年に京都高等工芸学校は開校し、中澤は、京都帝国大学教授を兼任したまま、京都高等工芸学校の初代校長となる。開校にあたり、中澤は、教材として利用可能な多くの美術工芸品の購入を積極的に進め、それは現在でも京都工芸繊維大学美術工芸資料館に収蔵されている。それらの美術工芸品は教材として講義や実習で使用されただけではなく、京都の伝統産業界にも積極的に提供された。京都高等工芸学校開校時の中澤の演説によれば、構内に参考品陳列所を設けてひろく一般に公開することを考えていたこともわかる。中澤の参考品陳列所構想は、中澤がヨーロッパで視察した多くの実業学校が博物館を併設していたことに依るが、それは同時に学校や博物館の設置を積極的に勧めたワグネルの教えを受け継いでいることも明らかである。

そして、中澤がワグネルから受け継いだ最大の考え方が、現場主義だったと考えられる。中澤はしばしば「学理と応用」という言葉を用いているが、これは、最新の研究を究める(学理)だけではなく、それをものづくりの現場に応用させなければいけないという意味である。実際に、中澤は、東京大学の教授をつとめながら工手学校の校長も兼任し、京都帝国大学の学長をつとめながら京都高等工芸学校の設置に尽力をして、校長になっている。これは、中澤が最先端の研究と同時に、ものづくりの現場における指導に対して深い関心を抱いていたことを示している。

ワグネルに話を戻そう。東京時代のワグネルもまた、研究だけではなく陶磁器制作の実践をおこない、明治20年には袖下彩の技法をいかした旭焼を開発し、東京職工学校のなかの窯で制作した。旭焼は、下地に装飾をほどこしたうえから透明の釉薬を掛ける技法で、下地に「絵」のような装飾をほどこすことが特徴である。実際に旭焼の絵付けには狩野派の絵師荒木探令(1857・1931)など

数学・物理学・化学などにも教鞭をとることになる。明治政府がはじめて参加した1873年のウィーン万博にあたっては事務局御用掛となり、出品物の選定をおこなうほか、ヨーロッパへ派遣する伝習生の手配などにも尽力した。明治11年から3年間は京都に設置された科学研究所ともいえる舎密局に勤務して、伝統産業の近代化に役立つ染料や釉薬の研究とその指導をおこなった。東京に戻ったのち、明治17年からはみずから提言して開校にこぎつけた東京職工学校(明治14年開校、東京高等工業学校、東京工業大学を経て現在の東京科学大学となる)で教鞭をとり、明治19年には新設された陶



図2
浅井忠 中澤岩太郎土像

の日本画家が携わっていたことがわかっている。そして、制作物の形状も、実用性のある皿のような形式もあるが、陶板というかたちで「絵」のように鑑賞する形式でも多く制作された。美術工芸資料館が所蔵する「南天に小鳥図陶板」(図3)もその一例で、一見すると陶磁器作品とは思えない絵画的な表現になっている。

ワグネルの旭焼作品が、陶磁器でありながら「絵」のようにみえるということには理由がある。明治6年に日本はじめて万国博覧会(ウィーン)に参加する。ワグネルはこの時点ですでに日本側の顧問的な役割を担っていたが、そのときに出品され、その後につきつぎと輸出された陶磁器類の装飾には、濃彩の花鳥や武者絵類が多かった。そのような装飾がやがてマンネリ化を指摘されるようになり、そこから明治政府は図案改良に乗り出す。そこで採用された図案の方向性が、同時代の日本画のような写実的な花鳥を題材とした図柄をほどこすことであった。実際に、明治10年代後半にはそのような装飾をほどこした陶磁器作品が多く制作され、さらに明治20年代になると、1893年のシカゴ万博のように、日本から輸出される陶磁器、漆器、七宝などの工芸品が、皿や花瓶のような実用的な

器玻璃工科の主任教授となる。その後、いったんドイツに帰国したのち再来日し、明治25年東京で没する。

幅広い知識を有していたが、ワグネルの最大の関心事は「近代化」にあったといっただろう。実際に、彼は明治前期の日本の、とくに美術工芸に関していくつかの重要な提言をしている。博物館の設置や伝統的な美術を教える学校の必要性、万国博覧会へ出品するにあたっての作品選定や海外への伝習生の派遣など、その的確な指摘はそれぞれが日本の美術工芸の近代化に貢献している。

ワグネルは、多くの優秀な学生を育てたことでも知られている。東京大学在任中に指導したひとり、京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校の初代校長中澤岩太(1858・1943、図2)である。中澤は、東京大学卒業後、おそらくはワグネルの勧めがありベルリン大学に留学する。明治20年の帰国後に東京大学の教授となるが、明治25年には工手学校(明治21年開校、現在の工学院大学)の2代目の校長となる。工手学校は、ものづくりの現場の職人を指導する技術者養成のための学校である。中澤は、東京大学で材料化学についての最先端の研究をするともに、それを現場でいかすことのできる人材の育成を早くから意識していたことがわかる。

この中澤が、明治30年に開設された京都帝国大学の理工科大学長として京都に赴任、その後、明治33年には、あらたに開校を予定していた京都高等工芸学校の設立準備委員となり、同年にヨーロッパ視察へ赴く。折しもパリで万国博覧会が開催されており、中澤はパ

ものだけではなく、額装されて、まさに絵画としかみえないようなものが多くなった。そのような傾向に合わせた作品が旭焼であるといっただろう。ワグネルが尽力したのは、その日本画の美しさを留めるために当時はまだ技術的に難しかった袖下彩という技法を開発したことである。

「南天に小鳥図陶板」は4面の陶板からなり、各陶板の裏面には「大日本東京深川区東元町旭焼製造所」と窯印がはいっている。旭焼は、はじめ東京職工学校内で制作されていたが、明治23年には渋沢栄一(1840・1931)を中心にできた旭焼組合の援助をうけて東京深川に旭焼製造所をつくり、そこへ窯を移す(明治26年閉窯)。したがって、本作品は、旭焼製造所時代の明治23年から26年のあいだの制作と考えよう。昭和5年(1930)に中澤岩太と植田豊橋(1860・1948)から京都高等工芸学校に寄贈されている。植田もまたワグネルの教えを受けたひとりであり、京都市陶磁器試験場の場長をつとめた。ワグネルから中澤・植田に伝えられたこの作品は、本学のルーツのひとつを明らかにものがたっているといっただろう。



図3
ワグネル 南天に小鳥図陶板